■第６章－概説■

781 年、桓武（かんむ）天皇が即位しました。

新たに建設された長岡宮の建物は、その大半が難波宮から解体・移築されたもので、瓦も８割以上が難波宮から運ばれたものです。

この事業で活躍したのが、摂津職（せっつしき）の大夫（だいぶ）である和気清麻呂（わけのきよまろ）でした。大夫とは、役所の長官のことです。

摂津職の役職は多岐にわたりますが、主な役目は、港や津といった交通の要衝、廃都となった難波宮、主要な寺院・神社の管理でした。

清麻呂は、長岡宮の造営進行が芳しくないため遷都を進言し、新しい都の造営大夫に就任しました。

平安宮の朝堂院の西隣には、現在の迎賓館のような国家的な饗宴（きょうえん）施設である豊楽院（ぶらくいん）が建設されました。

豊楽院の正殿である豊楽殿（ぶらくでん）は、朱雀門（すざくもん）や大極殿（だいごくでん）と同じように格式高く華やかに装飾されました。しかし、1063 年の火災で廃墟となり、その後再建されませんでした。藤原道長の時代には、貴族の間でかっこうの肝試しスポットだったようです。

また、道長は自らが創建した法成寺（ほうじょうじ）の屋根に飾るため、豊楽殿の緑釉（りょくゆう）の鴟尾（しび）を下ろさせたといった逸話もあります。

そんな豊楽殿の瓦の一部に、四天王寺の製品が使用されました。

四天王寺では、第５章で触れたように、奈良時代には官大寺の瓦の大量発注に応えられる専属の造瓦所（ぞうがしょ）が存在したとみられます。

和気清麻呂は、元摂津職大夫だった自分の経歴とコネクションを生かして四天王寺の瓦を利用し、平安宮の造営にあたったと考えられます。